

教育内容が詰め込み主義に偏っているのではないかと、との批判に加えて、労働者階級や貧困層出身の生徒が極端に少なく、エリートの再生産が行われるだけである、との批判がある。そのため、グランゼコール準備学級に進むことの少なかった階層からの進学者を増やすために、寄宿舎の提供、教材の無償供与、学習支援や個別相談などによるサポートが進められている。

エリート選抜のシステムに向けられた批判を、まったく異なる方法で「解決」しようとする動きもある。2019年、マクロン大統領は高級官僚を養成するグランゼコールである国立行政学院(ENA)を閉鎖することを発表した。

2019年初めにフランス全土に広がった抗議活動である「ジレ・ジョーヌ(黄色いベスト)」運動においても、エリート支配が主な標的となってきた。大統領自身も卒業生であるENAの閉鎖は、こうした運動に対する応答である。

このように、フランスにおけるエリート選抜は、大きな地殻変動を経験している。

第7章で扱ったスウェーデンやフィンランド(コラム)では、大学新入生の年齢構成が幅広い点が日本と大きく異なっている。社会人入学生の多さ、すなわち職業経験と大学入学資格の関わりという日本ではあまり議論されていない点に、スウェーデンではすでに半世紀以上の取り組みがある。

第8章で取り上げるのはイギリスである。イギリスのAレベルにおける外部試験機関の位置づけ、その運用方法、実際の試験問題と評価方法などからは、日本とは異なる大学入試のあり方、すなわち「公平」よりも「公正」を重視する考え方がみとれる。

最後の第9章では、日本の入試改革のこれまでの現状や議論をまとめている。「あとがき」では、各章をふまえた上で、日本の大学入試改革を見直す視座を提案している。

## おわりに

これまでも大学入試制度を国家間比較のかたちで研究した成果は出ているが(中島, 1986; 南部, 2016; 小川, 2017等)、本書は、教育方法を専門とする研究者による欧州各国における大学入試制度の研究成果である。すなわち、「教育評価」としての大学入試という考え方で各国の大学入試が検討されている。

どの国においても、大学の大量化とPISA型教育へ対

応するために伝統的な高大接続制度の形態を守りつつ、微調整しながら改革が行われていることが読み取れる。

日本も2010年代から大学入試改革が検討され始め、昨年からは具体的に実行され始めた。「生きる力」に対する理解の共有不足のためか、実行早々つまづいた感はあるが否めない。

大学エリート時代の大学入試は、選抜の論理が強く駆動していたため、入試の公平性や効率性に関心が強かったが、大衆化した大学入試は公平性だけでなくその教育性への関心が強くなっている。その意味で、本書は大衆化した大学における入学試験制度のあり方を考える上で必読の1冊である。

## 【参考文献】

- 小川佳万編(2017)『アジアの大学入試における格差是正措置』(高等教育研究叢書135)、広島大学高等教育研究開発センター。  
 中島直忠編著(1986)『世界の大学入試』時事通信社。  
 南部広孝(2016)『東アジアの大学・大学院入学者選抜制度の比較: 中国・台湾・韓国・日本』東信堂。

細尾萌子・夏目達也・大場淳編著

## 『フランスのバカロレアにみる論述型大学入試に向けた思考力・表現力の育成』

(ミネルヴァ書房, 2020年, 298頁)

荒井 克弘(東北大学・  
大学入試センター名誉教授)

## 論述式教育の創出

本書は、フランス教育の研究書という枠をこえて、日本の教育に一石を投じたいという、意思が強く感じられる一冊である。巻末に補章「国際バカロレア」を加えたのもより広い読者層を考えてのことであろう。世間では、フランスのバカロレアと国際バカロレアを混同しかねないひともいる。日本の教育はこの10年、高大接続改革で明け暮れた。それで改善されたのかと云えば、改

悪が多かったのでは、と懸念している。「学力の三要素」だの、「思考力、判断力・表現力」だのが、飛び交ったが、やかましい議論のほどに、中身がなかった。

フランス教育の専門家にしてみれば、もどかしい10年でもあったろう。記述式ならぬ‘論述式の試験’については、フランスの‘おほこ（十八番）’である。語りたいたいは尽きないほどあったに違いない。本書はいわばその一滴にすぎない。フランスの論述式作文とは単なる作文ではない、思考と表現を往復しながら、論理的な思考をつくりあげる綿密な方法をへて完成される作品である。フランスの中等教育は、哲学的な思考を生徒に埋め込むために論述式の‘型’を創り上げた。ベナールによる哲学教育の貢献も大きい。

### 本書の構成

序章のほか本編13章からなり、それに補章がひとつである。本編は大きく4つの主題に別れ、第I部に「フランスの大学入学資格試験：バカロレア試験」、第II部に「バカロレア試験に向けたフランスの初級・中等教育と教員養成」、第III部に「バカロレアを取って大学や職業社会へ」、第IV部に「日本への示唆」がまとめられた。

### 4部構成の概要

第I部はバカロレア試験の全体像を解き明かす導入編である。第1章でバカロレア試験の現状が紹介され、第2章で具体的な試験問題も示される。第3章ではバカロレア試験の歴史的な変遷をひと通り学ぶことができる。バカロレア試験を代表する「ディセルタシオン（フランス式小論文）」や「テキスト説明」の解説を受け、バカロレア試験の扉が厳かに開かれていく。19世紀から20世紀にかけて、バカロレア試験が何度も手直しされていることがわかる。ベナールによる哲学教育の復活運動、1932年に出版された哲学教科書がディセルタシオンの「型」の出現に大きく貢献した過程は興味深い。ヘーゲルの正・反・合の弁証法を活用した論述の「型」ができあがったのは第2次大戦後のことである。第4章のピエール・メルル氏の論文にたどり着いて何となくホッとする。何やら高尚な話を読まされている気がしていたのが、この章のおかげで、現実に戻され、等身大のバカロレア試験が見えてくる。

メルル氏の解説によると、マクロン政権による高等教育進路選択システム（Parcoursup）の改革は政権がスター

トして直ぐに着手された（2018年）。コロナ禍がなければ、20-21年のバカロレア試験がこの改革の第1回になるはずであった。改革は高校教育改革とバカロレア試験の総合的改革を図り、高校教育の多様化、進路指導の充実、バカロレア資格への高校成績の反映、また、志願倍率の高い場合などに、選抜を適用することも検討されている。

第II部の前半はいわば理論編で、フランス語と哲学の教育を事例に、ディセルタシオンの理念と指導内容が解説される。「書く」ために周到に用意された「型」は生徒個人の思考の幅を拓げるのに役立つ、表現の論理的な順序を吟味させ、説得力のある思考へと高めていく。バカロレア試験のディセルタシオンが目標であり、初等教育から段階的な準備を重ねられ、中等教育の最終学年はその集大成の時期となる。「自由に考える」ことを学ばせるのに、なぜ「型」の修得にこだわるのか、矛盾を感じないではない、という著者の自問自答はもつともであるが、型があることによって自由になれる、という解釈も頷ける。日本でも学校以外の世界では「型」の文化は歴史が長い。

第II部の後半では、中学校の科学教育（第7章）、歴史教育を事例に中等教育の教員養成制度が紹介（第8章）される。ディセルタシオンの考え、書く学習はすべての教科の根幹である。しかし、如何に教育課程が緻密にできていようと、すぐれた教員がいなければ、意味がない。理念を実践に変えるのが教員の存在である。

第III部では、Parcoursup改革と、学生たちのその後が語られる。複数の高等教育への分岐、大学の進級の壁も厚い。毎年夥しい数の留年、中退が出てくる。彼らのその後の選択もバカロレア制度の一部である。「高等教育の選択」「学生のその後」を通して、複数ある高等教育機関の相互の位置関係も見えてくる。高等教育には、無選抜の大学のほかに、エリート選抜をめざすグランド・ゼコール（準備級）、技能者を養成する技能短期大学（IUT）や上級技術養成課程（STS）などがある。大学以外の3つの高等教育には選抜がある。近年は就職の良いIUTやSTSへ普通バカロレア取得者が流入して、技術バカロレアや職業バカロレアの学生が押し出されるのがままた起きる。そのために特別の定員枠を設けるなどの工夫も施されている（第11章）。

第IV部は「日本への示唆」が中心であり、第12章に日本の商業高校で職業バカロレア試験用の指導プログラムを実践した記録が事例報告で載っている。第13章は「フランスの中等教育とバカロレア試験から何を学び取れるか」と題した、本書の総括である。フランス教育にもと

づく提案、意見が数多く述べられているのだが、日本にとっては断片的な「示唆」に止まらざるを得ない。本質的な問題に切り込むには両国の伝統の違いが大きすぎるのだ。

## 2, 3のコメント

第1は、高大接続の考え方である。本書では、フランスの高校教育と大学教育とは連続していることが前提である。教育の同質性が高く、フランスの教育は初等中等教育から高等教育まで一貫しているという前提に立っている。その理解は自信に満ち、堅固なものである。しかし、評者には違和感が残る。19世紀はじめに復活したフランスの大学は「大学の近代化」の旗手であった。古典的な学問を廃し、新しい学問を提唱し、専門科学を奨励した。ところが、人文主義の強いフランスの大学では、やがて一般教養教育に回帰していく。ベン・デービッド(1977)は「一般高等教育という考え方は、19世紀初頭以来、現在にいたるまで、大学に一般教育がないフランス及びドイツにおいては暗示的にのみ存在したのであるが(107頁)」と記している。高校教育と大学教育とは一般教育、専門教育に分離されたのであったが、「文法、修辞、論理、数学のような若干の一般科目が、すべての専門的知識科目の基本である」という理解のもとに、「高等学校と大学のあいだには際だった区別は」なくなった(デービッド、前掲書)。

20世紀後半の「大学の大衆化」は、理念ではなく、物理的に中等教育と大学教育とが分断されたかに見える。大学入学者のうち2年に進級できる者はせいぜい半数(序章)、しかも学問領域による差がない。つまり、進路選択のミスマッチよりも大学教育の要求に見合わないのである。結果、規定の就学期間(3年)でリサンス(学士)を取得できる者は入学者の3割と少ない。4年後の累積修了率でも4割に止まる(第10章)。大学教育の失敗とすることもできるが、高大接続の失敗と云われても仕方がない。いまや、この事実が語っているのは、高校と大学の不連続である。

第2は、中等教育の内容である。ディセルタシオンの教育はいまもなお、中等教育の範型として存在し得ているのだろうか。現在も、生徒たちは「型」の教育に勤しみ、反復学習によって思考力、表現力を高めているだろうか。バカロレア試験の現実はこれにも厳しい判断を下している。哲学試験の平均点は20点中7点、「普通バカロレア試験」でも47%の答案が7点以下、71%以上の答案

が20点中10点以下であった(第6章)。バカロレア試験の伝統が継承されていると云いがたい。この状況に鑑みれば、マクロン政権が取り組む *Parcoursup* 改革は的を射ているといえるのであろうが、困難な課題は多く残っている。中等教育の空洞化は先進国共通の問題でもあるのだ。

第3は、「日本への示唆」についてである。「示唆」が残念ながら、それとして通用しないように思うのは日本の教育の問題である。近代以降、日本の教育は選抜と切り離されることなく拡大を経験してきた。学校制度もまた教育以上に人材の選抜・配分制度としてその役割を果たしてきた。その事情が大きく変わったのはこのおよそ30年のことである。急激な少子化と高等教育の供給過剰によって、選抜が十全に機能しない世界が出現した。日本にとっては未知の教育の世界である。何を再生の契機とするのか、誰にもわかっていない。本書が一石を投じたとして、投じた先の様相が予想もできないのである。

## 【参考文献】

ジョセフ・ベン・デービッド(天城勲訳)(1982)『学問の府』サイマル出版。(Joseph Ben-David(1977). *Centers of Learning*, Carnegie Foundation for of The Advancement of Teaching)